



森鷗外著

阿部一族

# 目次

阿部一族	5
二人の友	75
佐橋甚五郎	107
護持院原の敵討	125

# 阿部一族

從四位下左近衛少将兼越中守細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、よそよりは早く咲く領地肥後国の花を見すて、五十四万石の大名の晴れ晴れしい行列に前後を囲ませ、南より北へ歩みを運ぶ春とともに、江戸を志して参勤の途に上ろうとしているうち、はからず病にかかつて、典医の方劑も功を奏せず、日に増し重くなるばかりなので、江戸へは出発日延べの飛脚が立つ。徳川將軍は名君の誉れの高い三代目の家光で、島原一揆のとき賊将天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の身の上を気づかい、三月二十日には松平伊豆守、阿部豊後守、阿部対馬守の連名の沙汰書を作らせ、針医以策というものを、京都から下向させる。続いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、曾我又左衛門という侍を上使につかわす。大名に対する將軍家の取扱いとしては、鄭重をきわめたものであった。島原征伐がこの年から三年前寛永十五年の春平定してからのち、江戸の邸に添地を賜わつたり、鷹狩の鶴を下されたり、ふだん慇懃を尽くしていた將軍家のことであるから、このたびの大病を

聞いて、先例の許す限りの慰問をさせたのも尤もである。

將軍家がこういう手続きをする前に、熊本花畑の館では忠利の病が革かになつて、とうとう三月十七日申の刻に五十六歳で亡くなつた。奥方は小笠原兵部大輔秀政の娘を將軍が養女にして妻せた人で、今年四十五歳になつている。名をお千の方という。嫡子六丸は六年前に元服して將軍家から光の字を賜わり、光貞と名のつて、從四位下侍從兼肥後守にせられている。今年十七歳である。江戸参勤中で遠江国浜松まで帰つたが、訃音を聞いて引き返した。光貞はのち名を光尚と改めた。二男鶴千代は小さいときから立田山の泰勝寺にやつてある。京都妙心寺出身の大淵和尚の弟子になつて宗玄といつている。三男松之助は細川家に旧縁のある長岡氏に養われている。四男勝千代は家臣南条大膳の養子になつている。女子は二人ある。長女藤姫は松平周防守忠弘の奥方になつている。二女竹姫はのちに有吉頼母英長の妻になる人である。弟には忠利が三斎の三男に生まれたので、四男中務大輔立孝、五男刑部興孝、六男長岡式部寄之の三

人がある。妹には稲葉一通に嫁した多羅姫、烏丸中納言光賢に嫁した万姫がある。この万姫の腹に生まれた彌々姫が忠利の嫡子光尚の奥方になって来るのである。目上には長岡氏を名のる兄が二人、前野長岡両家に嫁した姉が二人ある。隠居三斎宗立もまだ存命で、七十九歳になっている。この中には嫡子光貞のように江戸にいたり、また京都、そのほか遠国にいる人だちもあるが、それのちに知らせを受けて歎いたのと違って、熊本の館にいた限りの人だちの歎きは、わけて痛切なものであった。江戸への注進には六島少吉、津田六左衛門の二人が立った。

三月二十四日には初七日の営みがあった。四月二十八日にはそれまで館の居間の床板を引き放つて、土中に置いてあった棺を昇き上げて、指図に依つて、鮑田郡春日村岫雲院で遺骸を茶毗にして、高麗門の外の山に葬った。この霊屋の下に、翌年の冬になって、護国山妙解寺が建立せられて、江戸品川東海寺から沢庵和尚の同門の啓室和尚が来て住持になり、それが寺内の臨流庵に隠

居してから、忠利の二男で出家していた宗玄が、天岸和尚と号して跡つぎになるのである。忠利の法号は妙解院殿台雲宗伍大居士とつけられた。

岫雲院で茶毗になったのは、忠利の遺言によつたのである。いつのことであつたか、忠利が方目狩に出て、この岫雲院で休んで茶を飲んだことがある。そのとき忠利はふと腮髻の伸びているのに気がついて住持に剃刀はないかと言つた。住持が盥に水を取つて、剃刀を添えて出した。忠利は機嫌よく児小姓に髻を剃らせながら、住持に言つた。「どうじゃな。この剃刀では亡者の頭をたくさん剃つたであらうな」と言つた。住持はなんと返事をしていいかわからぬので、ひどく困つた。このときから忠利は岫雲院の住持と心安くなつていたので、茶毗をこの寺にきめたのである。ちょうど茶毗最中であつた。柩の供をして来ていた家臣たちの群れに、「あれ、お鷹がお鷹が」と言う声があった。境内の杉の木立ちに限られて、鈍い青色をしている空の下、円形の石の井筒の上に笠のように垂れかかっている葉桜の上の方に、二羽の鷹が輪をかいて飛んでいたの

である。人々が不思議がつて見ているうちに、二羽が尾と嘴くちばしと触れるようにあとききに続いて、さつと落ちて来て、桜の下の井の中にはいつた。寺の門前でしばらく何かを言い争っていた五六人の中から、二人の男が駈かけ出して、井の端はたに来て、石の井筒に手をかけて中をのぞいた。そのとき鷹は水底深く沈んでしまつて、齒しだ朶だの茂みの中に鏡のように光っている水面は、もうもとの通りに平らになつていた。二人の男は鷹匠衆たかじやうしゆうであつた。井の底にくぐり入つて死んだのは、忠利が愛していた有明ありあけ、明石あかしという二羽の鷹であつた。そのことがわかつたとき、人々の間に、「それではお鷹も殉死したのか」とささやく声が聞えた。それは殿様がお隠れになつた当日から一昨日おとつひまでに殉死した家臣が十余人あつて、中にも一昨日は八人一時に切腹し、昨日も一人切腹したので、家中誰一人かちゆうたれ にな殉死のことを思わずにいるものはなかつたからである。二羽の鷹はどういう手ぬかりで鷹匠衆の手を離れたか、どうして目に見えぬ獲物えものを追うように、井戸の中に飛び込んだか知らぬが、それを穿鑿せんさくしようなどと思うものは一人もない。

鷹は殿様のご寵愛ちゆうあいなされたもので、それが茶※の当日に、毗ひかもお茶※所の岫雲院毗井戸にはいつて死んだというだけの事実を見て、鷹が殉死したのだという判断をするには十分であつた。それを疑つて別に原因を尋ねようとする余地はなかつたのである。

中陰の四十九日が五月五日に済んだ。これまでは宗玄をはじめとして、既西きせい堂、金両堂こんりやうどう、天授庵てんじゆあん、聴松院ちゆうしやういん、不二庵等ふじあんの僧侶そうりよが勤行ごんぎやうをしていたのである。さて五月六日になつたが、まだ殉死する人がぼつぼつある。殉死する本人や親兄弟妻子は言うまでもなく、なんの由縁ゆかりもないものでも、京都から来るお針医と江戸から下る御上使との接待の用意なんぞはうわの空でして、ただ殉死のことはかり思っている。例年簷のぎに葺ふく端午しやうぶの菖蒲あやぶも摘つまず、ましてや初幟はつのはりの祝をする子のある家も、その子の生まれたことを忘れたようにして、静まり返っている。